

---

# 風林火山の暇潰し－魔術師達の世界にて－

MyLife

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風林火山の暇潰し―魔術師達の世界にて―

### 【Nコード】

N5093I

### 【作者名】

MyLife

### 【あらすじ】

風林火山と呼ばれる四人の男子高校生が魔術が栄えている世界に飛ばされる！？手に入れた魔術を用い、四人はその異世界で大暴れ！はたして四人はどのような物語を紡ぐのだろうか？――

――※風林火山と言えば武田信玄を思い浮かべるかもしれませんが、これは歴史物ではありません。れっきとした異世界ファンタジー物です。

## 暇潰し／序章（前書き）

拙い文章ですがあなたの様の懐の大きさで乗り切って下さいまし。大変申し訳ありません。

## 暇潰し／序章

日本。そう、紛れも無い日本のとある学園の屋上。そこに溜まっている四人の男子学生の内、一人の前髪で片目が隠れている赤髪の男子学生、火漣<sup>ヒガタ</sup> 京<sup>キョウ</sup>は残り三人の討論を寝転がりながら聞いていた。「いんや、だーからさあー！俺っちが思うにこの世全ての喫茶店はメイド喫茶に変えるべきだってーの！」

銀髪でサングラスを掛けた男子学生、浜岸<sup>ハマギシ</sup> 嵐<sup>カザシ</sup>が熱心にそう言う。真にどーでもいい事に熱心になる変な男子学生である。

そしてそんな男子学生の友達なのだからもちろん変人な訳で…………

「オイ待てコラ。お前それはオレがウェイトレス好きなの分かって言ってるのか！」

不精髭に体格の良い茶髪のこの男子学生は山岡<sup>ヤマオカ</sup> 甲汰<sup>コウタ</sup>。少し前までは高校生に見えないのが悩みだったが、最近吹っ切れたらしく、より豪快になった。

「自分は甘い物さえあればそれで充分だ。」

派手な金髪をツンツンに立たせているこの男子学生は林田<sup>ハヤシダ</sup> 翠<sup>スイ</sup>。元暴走族の特攻隊長だったとか。見た目は細身だが超がつく甘党。

「だあー、全然分かってねーなー！いいか俺っちがメイドの素晴らしさを教えてやる、メイドってーのは――」

「うるせえ。オマエのメイド好きはどーでもいい！それより駅んここに可愛いバイトが入ったんだけど見に行かねえか？」

「ヤマの言う喫茶店は最近出来たところでは？あそこのパフェは最悪だ。ゆえにパスする。」

グダグダ。見た目も違えば中身、性格もばらばらである。

京は思わず苦笑を漏らす。毎度毎度こんな感じなのだが、全く飽きが来ない。

とはいえさすがに屋上の景色も見飽きたし、なにより微妙に寒い。秋とはいえ風はまだ冬のそれだ。

「どーでもいいけどよ、さっさとここから出ねえかあ？」

堪らず京がそう言うのと三人が振り返る。その時の表情は呆れが含まれている。

………なんか腹立つ。今まではどちらかと言えば京が呆れる立場だった。なのに、何故？

「ヒガच्छ、だーからここを立ち去って次にどこに行くかを話してるんだって」

「あ？んなもんどこだっていいだろオ？」

「それじゃあヒガ。どこか言ってみやがれ。」

山岡甲汰、ヤマの言葉にヒガと呼ばれている京は軽く腕を組んで、

「…………どこでもいいだろ。」

「ヒガさん、それは答えになっていませんよ。」

林田翠ことヒスイが丁寧にツツコミ。それを見ながら浜岸嵐ことカザが笑いながら寝転ぶ。どーでもいいが結局移動はしてくれないのだろうか？

「はぁー、んにしても。暇だよなー。俺っちとしちゃあこの辺で一悶着欲しいところなんだけど？」

そして物騒な事を言い出す始末。しかし京やヤマ、ヒスイはカザの言う事がわからないでもなかった。

元々四人は知り合いでも友達でもなく、クラスメートだった。

だがただのクラスメートではない。四人はそれぞれの出身校では最強の不良を謳っていたのである。

つまりはライバルといったところだろうか。

しかし時経ち全員が拳を交えたところでなんだか仲良くなっていたのだ。それから四人は共に行動し、ついには四人の住む地域に居る不良達のトップにまで上り詰めた。

そしてついには通り名までつけられる。

疾きこと風の如し、浜岸風

静かなること林の如し、林田翠

侵略すること火の如し、火潟京

動かざること山の如し、山岡甲汰

そう、『風林火山』と――――

……まあ、全て名前から取った当て字なのだが。

つまり言いたいことは四人が結束した頃はまだ立ち向かってくる連中が居たのだが、今では完璧に居ないということだ。

故に毎日が暇。スリルどころかこのままボケてしまうのではないかなと思ってしまう程安泰の日々なのである。

だからカザの言えることは共感できた。

京とヒスイ、ヤマは互いの顔を見てため息を漏らすとカザと同じように横一列に寝転がる。

「たーしかに最近つまんねーな。オレらに敵う奴らは居ないし。」

ヤマがそう言うに残りの三人は同意する。

「では外国に進出などは？外人は体格が良いと聞くが？」

「パース。つかヒスイ。お前海外行ってまで喧嘩してえのかア？」

……それもそうですね、とヒスイが呟くようにそう漏らすと静寂が四人を覆った。

珍しい。四人を知る者が居れば間違いなく驚くだろう。教師に至っては自分の目を疑い、空いた口が塞がらないだろう。それほど四人が静かになることは珍しい。

「あゝあ。空からなんか降ってこねーかなー？」

カザがそう呟き空を見上げるが、やはり空からは何も降って来ない。

そりゃそうだろう。降ってくるとしたらせいぜい鳥の糞くらいなものだ。

四人ともため息を漏らす。恐らく全員が同じことを思ったのだろう。そんな時だった。



『汝、波乱を求めるか?』

ゾクッ!!?

四人は同時に起き上がり、すぐさま周りを見回し臨戦状態になる。

普通の学生ならこうも軽快に動く事はできないだろう。せいぜいゆっくりと辺りを見て気のせいなどと判断するのが関の山だ。

しかしこの四人の喧嘩で培われた警戒心は獣のそれに近い。故に今起こった事が危険だということを本能で理解したのである。  
四人は互いに背を合わせ、自分の見える範囲を警戒する。

「んー、何も見えないなー。ヒスっち、そっちはー?」

「目に見える危険物は無い。ヒガさんの方向はどうです?」

「あ? こっちも異常はねえなア。ヤマ、そっちはどうだア?」

「右に同じく以下同文。ガハハ、良い夕焼けだ!」

呑気な笑い声が響く中、京はフルで頭を働かせていた。

一体今のは? 声は確かに聞こえた。どこから? わからない。だがス

ピーカーや直接話し掛けられた感じではない。誰？声は全てに当て嵌まった。成人男性の声にも聞こえるし成人女性の声にも聞こえる。老人の声だと思えばそうだろうし、幼子の声だと思えばそうなる。つまり声では判断できない。では言葉の意味は？言葉の意味は……

「汝、波乱を求めるか、か。ハッ、何のRPGだア？」

「つーか俺っち達の話聞いてやがったようだなー。恥ずかしいぜー。」

「しかし自分達に悪戯を仕掛けて何のメリットが？むしろ見つかった時のデメリットの方が大きいのでは？」

「あん？じゃあもうソイツらはどっか行ってんじゃねえの？」

ヤマがそんな予想を述べる。……確かにそうだろう。捕まったら悲惨な末路を辿るのにわざわざ犯行現場に留まるやつは挑戦者か<sup>マッ</sup>変態くらいなものだ。

四人は肩の力を抜く。どんなに辺りの気配を伺っても何を感じられないからだ。

「……とにかく校舎の中入らねえかア？もしかしたら犯人捕まえれるかもしれないよ。」

京の言葉に三人は頷く。それにしてもちようど良かった。何をし暇を潰すか悩んでいたところで暇潰しを見つけたのだから。そ

ういう意味では悪戯を仕掛けてきた人物に感謝せねば。

四人はそんな事を考えながら屋上を後にしようとしたまさにその瞬間――――

『汝、波乱を求めぬのか？』

――――再びその声が聞こえた。

なんともまあタチの悪い悪戯だ。まさか再び挑発を掛けて来るとは思ってもみなかった。

「ヒガさん。この声の主は完璧自分達に喧嘩を売っていますよ。」

「あア。んなもんわかってる。」

屋上の扉から手を離し、四人はずかしくと屋上の中心に立ち、周りを見回す。しかしやはり声の主は見当たらない。

「これは俺っち達をナメてるのかねー？」

「ガッハッハ、何でもいいじゃねーか！まだオレ達に喧嘩を売ってくるヤツらが居るんだからよ？オイ、この声の主い！」

ヤマは豪快に笑ったかと思うと宣言するように声を上げる。辺りに静寂が覆い、ヤマは少し間を空けると。

「オマエが何言ってるのか意味わかんねえけど答えてやる！オレ達は波乱を望む！！だからオレ達を楽しませやがれ！！」

『契約は完了した。ここにゲルヘイムへ繋ぐ扉を開かん。』

瞬間、風が吹き荒れ空は闇に覆われた。全ての時は止まり、動ける者は居ない。

この場に居る四人以外は。

「な、んだア！？どーなってやがんだ！！」

京が驚きの声を上げる。意味がわからない。状況理解不可。それは他の三人も同じらしくそれぞれ驚きの声を上げていた。

こんな体験一生無いし、普通に暮らしていればまずこんな状況にならない。なのに何故こんなことに？

「オ、オイ！し、下！グラウンド見てしろよ！！」

ヤマがフェンス際でそう叫ぶ。三人は急いでフェンスに寄り、ヤマに言われた通りグラウンドを見た。

「なんだよ、これ」

誰がそう呟いたのかわからない。しかし皆がそう思ったに違いない。

そこにグラウンドは無かった。代わりに真っ黒な闇がそこを覆っている。

『扉は開かれた。波乱を求めし者よ。その手で全てを掴むがよい』

それを機に声は途絶えた。後に聞こえるのは荒れ狂う風のみ。

「オイ、扉ってまさか下のアレじゃねえの？」

「いやいやいや、じゃああれに飛び込めてー？ちょっと嫌だなー」

ヤマとカザが呑気な会話を交わす。どうやらもうこの状況に慣れたらしく、いつもの思考が戻ったようだ。

そんな二人の会話を余所に京はフェンスに上り、下を見つめる。その姿に三人は冷や汗を流し、まさかと呟く。

「俺ア行くぞ。」

そしてまさかの爆弾発言。

「ヒガさん、下のグラウンドがその入口とは限りませんよ。いや、それ以前にさっきの話を信じるのですか？」

京は何も言わない。代わりにニヤリと笑うだけ。

その姿にヒスイは面食らうが、すぐに頷き、

「自分も行きます。」

「ヒスっち！？」

ヒスイもフェンスに上り、京と肩を並べる。京はあアとだけ答えるとグラウンドを背にヤマとカザを見下ろす。二人は躊躇っているようだ。

「オイ、ヒガ、ヒスイ。マジで飛び降りんのか？」

「ハッ、当たり前だ。こんな面白そうな機会、二度とねえぞ？」

ヤマは止めようとするが京は止める気は無いらしい。

「けどヒガっちさー。さっきヒスっちも言ってたけどさっきの言葉信じるのかー？ぶっちゃけこの状況誰かの悪戯かもしれないねーぜー？」

悪戯なア、と京は周りを見回し、改めてそれは有り得ないと判断する。

こんな状況をこの世界の人物ができるはずがない。

「それで飛び降りたら地面にグシャ、だったら笑い事じゃねーよー？」

「そんな時はそんな時だ。別にこの世界に未練はねえしなア。お前らはあんなのかア？」

ヤマとカザは互いの顔を見る。未練は……ある。ありまくると言ってもいい。正直死にたくない。

だが。だがここで二人が飛び降りないと言ってもフェンスの上に突

っ立ってる馬鹿二人（京とヒスイ）は飛び降りるだろう。

もしも下のグラウンドを覆っている闇が扉とかいうものだとしたら京とヒスイはこの場から消えるのかもしれない。反対にこれがただの悪戯で扉も何にも無いのに飛び降りれば二人は間違いなく死ぬ。つまりどちらにせよ二人はこの世界から、ヤマとカザの目の前から消え去るということだ。

それは退屈な毎日を予期させるのに十分な予測だった。そして二人は、いやここに居る四人全員退屈を望んではない。

「はあー。つたく。」

「じゃあねえなー！」

ガシッ！とヤマとカザは力強くフェンスを握ったかと思うと一瞬でフェンスを上り、先に上っていた二人と肩を並べる。

「ハッ、んだよ。結局風林火山揃っちゃったなア？」

「ガッハッハ、一人でも欠けたらよりつまらなくなるからな！」

「はあー。明日は俺っち達風林火山が新聞の一面に載るかもなー？馬鹿四人が飛び降り！ってよー？」

「自分はヒガさんに着いて行きます。甘い物が無いかもしれないの



は少し痛いですが。」

四人はそれぞれそう言うとき声を上げて笑い、そして。

「ハッ。んじゃまあ、暇潰しに行くとしますかア！」

四人は屋上から飛び降り、  
グラウンドを覆う闇に飲み込まれ、  
その場から完全に消え去った。

その瞬間、空を覆っていた闇が薙ぎ払われ、時は動き出す。

そこにはいつもの世界が戻っていた――――

## 暇潰し／序章（後書き）

主人公は火潟京ですが、他の三人の話も書きますのでご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5093i/>

---

風林火山の暇潰し－魔術師達の世界にて－

2010年10月28日04時31分発行